

# 山と博物館

第12巻 第3号 1967年3月25日 大町山岳博物館



## 自然休養地を大切に

大糸線が電化しなかつた頃、つまり信濃鉄道が経営した頃、大町―松本間に軽便鉄道が走っていた時代、今の運転回数に比べれば問題にならない僅かだった年台、白馬岳への登山者は東京から夕方大町へ着いて百瀬慎太郎さんの対山館へ全部が全部宿泊、翌日バスで白馬岳へ向った。その後、大糸線が信濃四ツ谷まで延長した時代は四ツ谷の白馬館が宿泊基地になり、更らにバス道路が完成して、猿倉が基地、最近ではスピード・アップでこれが白馬尻へ延長、つい最近では日帰りが出るという移り変わりである。

所得の上昇、余暇が出来る。こと交通機関の発達で登山者を含んだ観光客は年々増大して行くのは明かだ、これがまた奥地へ奥地へ足をのばして行く。最近、都市化のはげしい進展で国民生活に必要な自然環境は急激な減少を見ているので休養地として北アルプス一帯が選ばれるのは当然の現象である。

従ってこれ等観光客を收容する施設は必然的に増加し商業観光地として面目を一新し地方の発展ともなる。しかし一方では自然環境が汚染され、荒廃の実情である。

観光客は吸収の客体である天然資源が年々汚染破壊されることは自然休養地としての価値を失うので心すべきである。しからばこれをいかに防ぐかということになれば難問題で解決は困難であるが、無秩序な企業のは正と自然保護思想の普及の外ないと考えられる。

外国からの観光客にくらべ内地の観光客は相当の開きがある。昔から「旅の恥はかきすて」の通り旅へ出た解放感は大いに発揮されている。これは現在も昔もあまり変わらないように見受けられる。グループによっては非常によくなってきた。個人個人の場合が問題を生じている。天然資源は一度破壊されれば取り返しがつかない、国民生活に必要な自然休養地はお互に護りたいものだ。

(古川 潔)

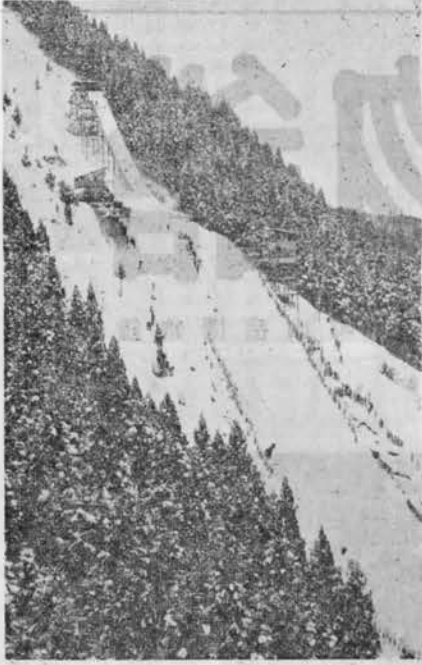
# 今冬スキー拾い歩記 (2)

来年白馬であいましよつ

スポーツの祭典、国民体育大会の冬季大会スキー競技会が、来年は八方尾根で開くことになった。そこで白馬村ではことしの第二二回大会が二月十六日から四日間、青森県大ワニ町で開かれたので、来年の参考に、村会議員全員を始め、役場関係、競技関係、宿舎関係と総勢七〇名近い視察団を編成して勉強に出掛けた。

なにしろ団体となればたとえスキー競技会であっても、天皇陛下の御名代が来、選手監督、役員を合わせると三千名以上となり、それに観衆を合わせれば一万人という人出になる。昨年の旭川大会では大会費四千万円を計上したそうである。報道関係一ツ例にとつてもNHKだけで百二〜三十人が来て、テレビの実況生放送をするし、競技も一種目五百五十人前後が出場するため、大回転競技などは十日間に分けて行すが、成年、少年組は朝十

団体の開かれた大ワニスキー場のジャンプ台



時に競技を開始し、一分に一人づつスタートさせるのであるが、休みなく続けて最後の選手が滑るのは午后四時近くになるわけで、選手も役員も昼食抜きに重労働である。

視察団の一番の注目の的は、大会の花開会式をどのくらい大がかりに行うかであったが結果的には大したことはなかった。というのは、昨年の旭川大会ではあまり大がかりにやったので、ことしからは団体委員会規定で、派手なものにはマカリならぬということになり、プラスチックの市中行進も、聖火の点火もなかった。しかし青森県では、ことしの大会を開くに当って、地元の高い言葉として「親切」というのが、駅には常時係員が待機して選手を暖かく迎え、親切に案内して、全員に名物の青森リンゴの袋入れを配ってくれ、スキ場でも津軽味噌と大ワニ名物のモヤシ入りの暖かい味噌汁を何杯でも飲ませてくれ身心共に暖かいもてなしに

心まで暖められ、視察団全員、来年は我が村で開く団体を是非成功させたいと話していた

なにしてる人口六千そこ／＼の村で団体が開かれるのはもちろん初のこと。八〇級ジャンプ台の建設費一千数百万円や駐車場の建設などを含め三千万円近い金が必要なのわけ、大変なことである。

(2)



第二十三回団体冬季大会スキー競技の開かれる八方尾根

今やリフトの無いスキー場はもはやスキー場ではなくなつたという。八百円の宿料が高いいながら、都会のスキーヤーは良くリフトに乗る。一人一日十回が平均塔乗回数であるというが、皆一日千円以上をリフトに払っていることになる。リフトが大系線沿線のスキー場に出来てから十年たらずであるが四

十一年暮れの白馬村内のリフトの総延長は一万二千七百メートルを越え、親の原分六千五百メートルを越え、親の原分六千五百メートルを越え、親の原分六千五百メートルを越えることになり、白馬から大町までの距離にち／＼と匹敵することになる。まったく驚く他ない。この傾向はますます進み、スキー場はどんどん開発されてゆく、今計画中のものに、遠見尾根ケーブルとリフト二本があるが、大系線沿線のスキー場はますますもって全国屈指の大スキー場となるだらう。

## 鹿島槍国際スキー場のこと

鹿島槍の新雪が一風ごとに里におりて来てそれに追われる様に野沢菜漬やスキー場整備に忙がしい日々を過ぎあれもやりたいこれとも思いながらスキー場開きがやって来るのがこの二、三年のきまっていた例である。スキー場開きが行なわれシーズン以外七、八月の夏期シーズンを除いてほとんど冬の為の準備であり整備である。私達の生活はこの時からが本番であり、「あなた出番です」と云う事になり、すべてのものが動員されて年末年始の混雑と闘うのである。

天候に左右されるスキー場経営にとって、一日一日が雪になるか風が吹かないか雨になりはしないかと一喜一憂の毎日であり年末年始の天候は神にも祈りたい気持ちでいたす積雪の条件がよくなる様に空にとらめっこである。条件の悪い時にも何んとかスキー場にきた感激を味わえる様に雪を運んだり、塩をまいて斜面を凍らせたりして見るが気休めで偉大なる自然条件には何んとも致し方のない場合が多い。こんな時はただ、御神酒を戴き神に祈るのみである。

スキー場の混雑と共に骨折、ネンザ、切傷等の事故が起りやすくなつて来た。近年スキーの締具はショックがあるとはずれるセフティンディングになって来たのでこの種の事故は減つてもよいと考えられるが現実はいつこうに減つてはいない。骨折、ネンザ等する時は相当強い転倒をしても連ねてもはずれない時が多い。又スキーがはずれてもかまらなくて骨折する場合もあるし、回転性能をよくするためにエッジがスキーの外側に出ているスキーがほとんどでこれが刃物となって切傷する事故が非常にふえている。こうなるとぬげてもぬげなくとも転倒すれば傷害の可能性はあるわけで、スキーが云々安全な安全な用具と一概には云えないのである。

(長沢 武・白馬村公民館主事)



鹿島権国際スキー場と鹿島権

斜面、雪質等によって事故の多い少ないはあるが、要は自分の技術とスピードの限界を自覚し安全なスキーをすることが事故を起さない一番の方法である。

神風スキーヤーも年々ふえていく。密集しているスキーヤーの中へスキーに聞いてくれと云わんばかりの姿勢で突込んで行く、こんなスキーヤーに限って自分も怪我をするし他人にも迷惑をかける技術相応なスキーの出来ない人達である。衝突事故はされた方が怪我が大きい。不意に衝激を受けるからだろうか。流れの激しいコースには絶体にポーンとして立っていない事である。将来は道路なみに交通規制をしたりスピード制限によって事故を防ぐ様にしなければならぬ時が来るだろう。

スキー講習も年々盛んになって、いつ見ても数団体はスキー場内に見られる様になった。お客に先生と呼ばれてくすぐったい思いをしながらのスキー指導も天気さえよければ能率もあがり教える事に喜びを感じるが吹雪雨

風の時の指導は大変である。手足が凍えて声も思はずに出ない。手先、指先に力を入れたり時計を見たり能率のあがらないことおびただしい。人それぞれによって進歩の度合いが違うものでしょっとしたヒントで行程の上でだいぶ差が出て来るものである。人間の心理として上達の早い人は欲が出て来るし、遅い人は意欲を失い勝ちである。スキーはバランスの技術でもあるので上達すればする程わずかの作用で回転が出来る様になるし、疲れもそれに比例してそれ程感じなくなるものである。

真剣に教えようとする生徒が一回落るうちに何回か滑るようになり口で説明して滑る端で見て感ずるよりも重労働な仕事である。シーズンがくり返されるにつれて、スキー場も派手な色彩で色どられる様になった。今流行ミニスカートとやらをはいてリフトに乗

スキーヤーはリフトで(黒沢リフト)



る強心臓の女性。原色のセーターに原色のスキーツボンも粋気なロマンスグレイのオジサマ。さまざまな服装は見ていて楽しい怪我をした女性が涙を流してせつかくのお化粧がはげたりスキー場にヘヤビースが落ちていたり話題はつきない。スキー場はスポーツの愛好者が集る所と思っていたら人のものを無断で失敬していくやつがふえて来た。スポーツ人にあるまじき行為である。楽しみにして来たスキー場で怪我と盗難騒ぎやなものはない。欧州のスキー場には盗難騒ぎはほとんどないと聞いた、お化粧や着るものを派手に着るばかりでなくもっとスキー場へ来た人達が大人になってももらいたいものである。

旅と酒とはきつてもきれいなものらしい。消灯時間になってもジュウクボックスは高らかにひびきアルコールの入った話声はどこ迄も聞こえる。騒音の中で寝ている他の客の事も考えてもらいたいがアルコールはそこまで気をまわしてくれぬらしい。

白一色のスキー場も四月の初めともなればあちこちに地肌が見られ冬中に貯えられた弁当の空箱紙屑が顔を出し始める。雪消えともなればスキー場一面花が咲いた様である。私達はこの清掃に一週間は費さなければならぬ。新雪の中へちょっと埋めて外観をつくらって帰った置物が雪消えと共にすべて顔を出してくる。新緑の

季節ともなればスキー場一帯も高地湿原となり多数の草花を咲かせ訪れる人も多い。自然を愛するちよっとした気持があれば春訪れた人達に不快な思いをさせずにすむ、旅のはじは「かきすてす」かきよせて持って行く位の気持がほしいものである。

### 特別天然記念物

#### ライチョウ映画完成

企画・製作文化財保護委員会、長野県、富山県、静岡県の記事映画、特別天然記念物ライチョウは撮影開始以来満一年、このほど文部省試写室において完成試写会が行なわれた。この作品はイーストマンカラー35ミリ、30分のものでライチョウの生活を四季にわたって撮影したものである。撮影に当たってはライチョウの生息調査を行なった本館の学芸員、信州大学教育学部生熊研究会員が現地協力し爺ガ岳に上高地に富士山とライチョウの生活をカメラと共に追いつづけた。



映画の一カットとヒナ誕生



# 信州植物寸景

## 横内 斎

(その二)

ニマンサク *Dianthus cercidifolia*  
Maximowicz キンキョク科

科を立てることもある。葉の丸い灌木で、花が紅葉時の十月下旬頃咲く、糸状の花弁は五片で、美しい赤褐色、ベニマンサクの異名がある。紅葉の美しさは格別で谷がために赤い。

本州中部と中国と四国の一部に産する。木曾谷には殊に多い、今所木曾川支流の黒川の右岸、木曾山林高校の学友林にあるものがその南限である。

ヒメスミレサイシン *Viola Yawawana*  
Makino すみれ科 葉、柄共にまばらに毛がある。根茎は太くて長い、いわゆる細辛形、葉は広い卵形で心脚が深く入っている。質はうすくて硬い、花は白色が柄は無毛で紫の斑点がある。群生する。戸隠山、燕岳、烏帽子岩、御嶽、八ヶ岳などに産し、甲斐、秩父地方に分布する。フォッサマグナ地域系の要素で、その分布の中心は八ヶ岳だろうと思う、なぜならば八ヶ岳の中腹には至る所に産し分布の法則から言って、その発生地もとても多いというのに当てはまる。

ウスギタンポポ *Taraxacum shinanens*  
e. H. Koidzumi きく科 一名シナノタンポポともいう。茎葉他のタンポポに比べて軟かい、そして丈が長く50cmにもなる。花は淡黄色、海拔500〜1300mぐらいに带状に分布する。更級、下水内、下高井に産する、日本海地域系要素である。

ミスギ *Lycopodium cernuum* Linn  
aus ひかげのかずら科 熱帯産の小形のシダ、茎は細く下部は立ち上部はわん曲している。上端に根と新苗を生ずることが多い。

葉は密につき、枝は又状に分れる。葉は線状針形、子葉穂は短かく無柄で点頭する。

信州では中房と上高地温泉の湧出口付近に産する。北海道の温泉地にも一ヶ所産する。西南本州、四国、九州に分布し、琉球、台湾から広く両半球の熱帯に分布する。これから氷河期における気温の高さをある程度推測することができる。

トツバタ *Chionanthus vetulus*  
Indley et Paxton もくせい科 高木で葉はカキのそれによく似ている。全縁で若木のみは重鋸歯がある、中肋上に細毛がある。ガクは四深裂で皮針形花筒はガクの一乃至一・五倍、裂片は線状倒皮針形で四裂、本州中部以南、対馬、朝鮮、中国東部、台湾に分布する。暖帯地域系の要素で、木曾の最南部神坂の落合川の丹り口で採集した。大正十五年のことである。

セリバシオガ *Pedicularis Keiskei*  
Franchet et Savatier ヲホのはぐさ科 多年草でほとんど無毛、茎は細く高さ50cmぐらい、上方は少し分枝する。葉は薄質で狭い卵形、羽状に全裂する。その状セリのようなのでこの名がある。花冠は淡黄色で割合大形、本州中部の南半の針葉樹林下に群生する、フォッサマグナ地域系の要素である。信州の中信以南の山地にはよく見かける。

オオバタツボスミ *Viola Langsdorffii* Fischer var. *caulescens* Gingins すみれ科 全体緑色、無毛または僅かに有毛、ミレとしては大形、50cmの高さに達するものがある。葉は丸く大形で、花色は淡紫色、側弁に白色の毛がある。寒地地域系の要素で樺太、千島、カムチャッカに分布し、本邦では北海道と本州の尾瀬の湿原に生える。この

種が計らずも下高井郡のカヤノ平の一角の北ドブの湿原に群生している。同種の南限がここまで延びたわけである。

カラフトイバラ *Rosa Maritima* Leve  
Iac ばら科 一名ヤマハマナス、灌木で無毛、葉柄性の刺がある。小葉は七〜九、長楕円形、上面にわずかに伏毛があるか、または無毛。下面はやく白い、花は一〜三で帯紅色、果は球形で赤色、朝鮮、満州、樺太、東シベリアに分布し、本邦では北海道とわが信州に産する。菅平には非常に多く、松代の地峠と聖山中腹に稀に産する。隔離分布の著しい例である。寒地地域系の要素である。

ヤツガタケトウヒ *Picea koyamai*  
Shirasawa けし科 高木、この類は少しぐらゐの記載では区別がむずかしいが、木肌がアカマツのように荒いことは一番の区別点であり、樹型が横広がりで枝の先があがる球果が短かい円柱形で、長さが四〜一〇cm、淡褐色、鱗片が円形などが特徴である。八ヶ岳西岳山中に純林があり、北は硫黄岳、南は南アルプスの西側を下伊那までに点々と産する。

### 博物館だより

ご寄付ありがとうございました  
アナグマ 郷津勝市ニホンザル 猿田正ノ  
ウサギ 玉井ノスリ 大羽博隆 トビ西沢俊彦  
男イシガメ 平林正 オオミズナギドリ 丸山  
孝男 オオヨシゴイ 下条昇 カケス 吉岡忠則

### 動物園移転完了

昭和三十三年八月、山岳博物館の本館が現在地に移転を完了したのであるが、当時、財源上の理由から、旧敷地にとり残されてしまった附属動物園が、十年後のことしに入ってからようやく移転を完了した形となった。  
去る三月二十一日、老朽化したアナグマ、

ノスリ、トビなどの飼育舎三棟を車に乗せて山岳博物館裏庭の動物園予定地へ移送したのであるが、これらの動物の新居は予算に制約されて未だ建設されていないため、当分はこのアバラ屋でまんしてらう予定である。一方、カモシカ園の給排水工事もこのほど完了し、獣類飼育舎(十三平方メートル)一棟、小動物舎(四平方メートル)一棟、飼育管理舎(十六平方メートル)一棟なども着工し、カモシカを中心とした新しい附属山岳動物園もようやくその形態を整えることとなった。

### カモシカ保護される

去る三月二十一日、春分の日が高瀬川入東葛温泉近くで一頭のメスカモシカが保護された。

二十一日午後一時頃犬があまり鳴くので東葛温泉仙人閣の主人が庭に出てみたところカモシカがいたので驚いて博物館に通報してきたものでさっそく引き取られた。

体は相当大きいものだがやせている上角が一本折れ、老年に近い個体であり現在カモシカ保護舎で館員が懸命に体力回復に努めている。

博物館での飼育カモシカはこれで四頭になった。

### 表紙説明

シジウカラの育雛—南アルプス山麓にて撮影 三石 紘

山と博物館 第12巻第3号  
一九六七年三月二十五日発行  
発行所 長野県大町市TFL(大町)二二一  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市下仲町  
大糸タイムス印刷部